

平成20年度 心身科学研究科修士論文要旨

自閉症児のコミュニケーション行動の 変化に関する一考察 —折り紙遊びを通して—

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅱ専修

天 本 奈津貴

本研究は筆者が他のセラピストと共に毎週一回、一年間の療育を行った、自閉症男児Y児（11歳）についての事例研究である。本研究の対象児であるY児は、折り紙に強い関心を持っており、折り紙遊びを通して、Y児のコミュニケーションの発達を促すことができるのではないかと考え、一緒に折り紙をすることにより、一方的なコミュニケーションから、双方でのコミュニケーションができるように改善していこうとした。

本研究では、折り紙遊びには(1)想像力を賦活する力がある、(2)コミュニケーションを必要とする遊びであると仮定し、折り紙遊びを通してY児のコミュニケーション行動の変容の検討、Y児にとって折り紙がどういう意味を持つのかを検討した。自閉症児に対して折り紙遊びを通して関わったという事例は少ない。折り紙遊びが自閉症児研究に何らかの新しい見解を示唆できる可能性があると思われた。

本児の折り紙遊び場面を第一期から第四期に分け、Y児のコミュニケーション行動の変化を検討した。さらに、Y児の一方的な関わりと双方向的な関わりの推移を検討した結果、第一期から第四期にかけてY児の一方的な関わりが減少していき、双方の関わりが伸びていったことが分かった。また自分に関すること、日常の出来事を筆者らに話してくれる姿が見られた。Y児との信頼関係を折り紙遊びを通して深めていったことにより、筆者らとの間に愛着が生じ、それを基盤にY児のコミュニケーションの発達を促すことができたのではないかと推測された。

Y児にとって「折り紙」とは、何の変哲のない折り紙が自分の欲しいものに変身する魅力的な遊びであり、Y児が関心を持つもの、身の回りにあるもの全てを折り紙で作り出し、自分の手元に置いているということに強い喜びを感じているのではないかと推測された。

本研究から、折り紙が自閉症児の想像する力を賦活するものであるということが示された。折り紙を自閉症児の治療教育や遊びに取り入れられた研究がないということからも、この研究を通して自閉症児の治療教育に折り紙が有効であるということが示唆された。

障害児を兄に持つきょうだいのプレイセラピー —引継ぎケースにおける セラピストの逆転移感情に注目して—

心身科学研究科心理学専攻 人格心理学研究Ⅰ専修

石 井 理恵子

本論文では障害児のきょうだいのプレイセラピーとして、きょうだいであるclが抱えてきた問題を検討し、さらには引継ぎケースの難しさを示す一事例としても本事例を示し、特に筆者の逆転移感情を振り返り、本事例においてプレイを可能とした要因に関して検討していく。clはM（小学校三年生、女児）、主訴は学校への行き渋り、母親との分離不安である。

36回に及ぶ面接は第5期に分けられると考える。第1期（出会い）はMがセラピスト交代を意識しながら徐々にセラピー場面で自分を表出していった時期である。そして第2期（トラウマ体験）はセラピーで描いた自殺の絵と類似する状況を日常生活で見ってしまったことにより、セラピー場面と現実の境界が曖昧になり、混乱が起ってしまった時期である。そしてその後の第3期（冬の時代）は、筆者との間に安定した関係を形成出来ない時期であった。しかし、長い冬の時代を乗り越え、第4期（運命を引き受ける）において、自分の生まれ持った運命・宿命と向かい合うことができ、第5期（相互やり取りを楽しむプレイへ）では筆者と関わりながら、遊びそのものを楽しむプレイへと遊びの内容が変化していった。

考察では①Mの問題、②筆者の逆転移感情の変化について、③本ケースにおける治療を可能とした要因について検討している。①では、Mのさまざまな問題について、Mの過酷な環境から考察を行っている。また②では、筆者の逆転移感情の変化から考察を行い、特に引継ぎケースである本ケースにおいて、「前任者」へのとらわれからMも筆者も開放されることが必要であったことに触れ、この段階に来るまでには時間が必要であったこと、しかしこの時間を共有し、関係の取れない時期を耐えることができたからこそ関係の中に入っていくことができたのであり、その冬の時代を耐えることが最も大切であったことを述べている。そして、最後の③ではその関係の取れない時間を耐えるために、特に筆者のような初心のセラピストは棒を守ること、信頼できるスーパーバイザーの存在、筆者を細やかに支援してくれる仲間の存在がclを抱えるためには必須のものとなるであろうことを述べている。

不登校生徒のためのグループ・アプローチ —フォローアップ調査からみた10年の歩みと展望—

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅰ専修

石丸 千絵

不登校生徒のためのグループ・アプローチである「ヨコ体験グループ」は現在から18年前の、1991年に主催者である池田によって名古屋大学で活動が開始された。その後池田の異動に伴い、東海女子大学へと活動の場所を変え、1998年に本学、愛知学院大学で活動を開始した。そして、本大学における活動は2007年度の活動をもって、丸10年が経過した。「ヨコ体験グループ」の活動では、スタッフは活動を随時論文として公共化しており、節目の年にはそれまでの活動をまとめている。そうした論文を含め、この10年間の活動を振り返り、質的研究をすることが必然であると思われた。

方法は以下の通りである。対象は1998年度から2007年度のヨコ体験グループの活動に参加した全てのメンバー。調査方法は、対象となるメンバーに調査協力の手紙とアンケートを送付した。そして返信があった者の中で、筆者による直接の面接インタビューに協力して頂けると記された元メンバーとは、返信のアンケートをもとに面接インタビューを行った。またフォローアップ調査を行なう前段階として、保管されているカルテや行動観察から、10年間に参加した者について数量的に整理した。

その結果、ケース終結率は64.71%であった。アンケートの返信からは、調査協力者のうち72%が社会的な所属を果たしていた。「ヨコ体験グループ」においては、中断者よりも卒業を迎えた者の方が、「ヨコ体験グループ」を離れた後の生活では社会に適応している傾向があると示唆された。また、4名の事例を取り上げ、個々における問題の発生からグループへの導入、治療経過、卒業後の生活を追った。

本調査からは、ヨコ体験グループに継続的に参加した者には肯定的な経験がされ、そうした肯定的体験が後の生活にも肯定的な影響を与える傾向が強いということが示唆された。そのため、今後はこのグループに参加したメンバーが継続的に参加できる環境を整えていくことが今よりさらに質の高い活動になるための課題となると考えられた。

愛着障害が疑われる男児とのプレイセラピー —一人世界からかかわりを求めるまで—

心身科学研究科心理学専攻 人格心理学研究Ⅰ専修

伊藤 志保

1. はじめに：わが国ではネグレクトや虐待によって施設に入所してくる子どもが急増し、主要な養育者との愛着関係が適切に形成されないまま子どもは、その後の対人関係に問題を抱えることが少なくない。本研究では、児童養護施設に入所している男児Yの事例から、愛着関係が形成されなかった子どもが抱える不安の深刻さ、愛着形成の難しさを考察した。

2. 事例の概要：6歳男児Yは、乳児期に父親から母親へのDVとネグレクトの疑いにより乳児院入所、2歳時に現在の児童養護施設へ措置変更された。日常では、自分の気持ちを通らなないとパニックになり、泣き続けたり、自分や他児をかむことがある。

3. 遊戯面接経過：初めはPR、Thに緊張し多弁になったり一方的に役割を与えて一緒に遊ぶことが続く。次第に安心して過ごすことができるようになり、Yのファンタジーが露呈されていく。Thには見えない侵入してくる敵と必死で戦い、やがて救済のテーマがあらわれるようになる。それに伴いThにだんだんと接触を求めるようになった。

4. 考察：セラピーを始めた当初、Yは不安回避として多弁、一方的なコミュニケーションのあり方から広汎性発達障害が疑われたが、このあり方は自閉状態という保護的機能により、特定の養育者によって守られた体験をもてなかったYが自分自身を守る方法であったと考えられた。Yが不安と恐怖に満ちたファンタジーの世界を表現するようになり、Yの中には自分が破壊されてしまう、世界が壊されてしまうという漠然とした不安が常にYの心を占めていたのではないかと考えられた。守られた空間において遊びの中に救済のテーマが現れ、Thとの関係性の中でThを愛着対象として認識し少しずつ接触を求め、一人世界から、人とのかかわりを求めるようになってきた。このセラピーを通して、Yは自閉的あり方から広汎性発達障害や、ファンタジーの奇妙さや対象関係を形成することの難しさから小児統合失調症を疑いながらも、Yには対象関係をつくっていける可能性が示され、最終的には反応性愛着障害の抑制型の事例であろうと考察された。今後のセラピーでは、共生期を過ごし、分離固体化へと対象関係を作っていくかが、Yとの課題であると思われる。

口唇口蓋裂児のいじめ問題と母親の養育行動

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅲ専修
今村 真実

問題・目的

子どもの年齢が幼ければ幼いほど養育者が子どもに与える影響は大きくなると考えられ、先天的な障がいを持って生まれてきた子どもの多くは、自分自身の障がい受容だけではなく、未だある社会の差別意識、医学的な治療、また障がい児を抱えた家庭内の問題などさまざまな問題を抱えて成長することになる。外見の変形や、糟屋ら（1993）が報告する社会性の未熟さが存在する口唇口蓋裂児はいじめの対象となりやすいことが考えられる。しかし、これまで口唇口蓋裂児といじめについての研究はされてきていないのが現状である。そのため、本研究の第一の目的として、患児のいじめの実態を把握すること、第二に本症が患児の学童期に与える影響、第三にいじめられっ子の要因の一つであると考えられる親の養育態度を調査し、今後のいじめ問題に対する対応について考察することを目的とする。

方法

本学歯学部附属病院口唇口蓋裂センターに通院する学童期の患児を持つ母親で、同意の得られた患児の母親84名に配布し66名から回答を得た。追跡調査としてインタビューを2名に行った。1. 量的調査（質問紙調査）として、2008年4月～10月に配布、実施し、回収したデータをExcelに入力した後、養育態度尺度を得点化し、SPSSファイルに変換し分散分析、T検定によって分析した。2. 質的調査として、①質問紙調査による自由記述、②インタビューの内容分析を行った。

結果と考察

本調査から口唇口蓋裂児のいじめは他児より高い確率で起き、その内容は口唇口蓋裂児の身体的特徴についての言葉の暴力によるいじめが多かった。学童期の影響として、プラスな影響、マイナスな影響と考えられたが、それらは学童期に限らず考えられ、人生においての影響と考えられた。口唇口蓋裂児を持つ母親の養育態度の特徴として、両価的態度が挙げられ、また、責任回避的態度、統制的態度が高くなった。その理由として、現代の風潮、母親の障がい受容の有無、調査方法が質問紙法であることが考えられた。母親の養育態度といじめに関連はみられなかったが、上記の理由から、みられなかったのではないかと考えられた。今後の対応として心理的ケアを含めた総合的な治療が望まれ、そのためにも、十分な倫理的な配慮を踏まえた上で、更なる調査とその知見の情報発信が望まれる。

不登校生徒のためのグループ・アプローチ における事例研究

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅰ専修
梶山 阿紀奈

不登校はいじめの問題と並び、学校臨床分野において現在も中核的な問題の1つである。本研究では、不登校生徒のためのグループ・アプローチ「ヨコ体験グループ」における2事例を通し、男性性・女性性の面から彼らにどのようなプロセスが生じたのか、またそれぞれの卒業の意味について検討したい。

【事例1】勇希、男性。勇希は父親に対して否定的なイメージや不信感を抱いていた。ヨコ体験グループにおいては、男性スタッフに対して「怖い」という感覚を持っていた。次第にそれまで距離を置いていた男性スタッフとの関わりを持つようになり、男性スタッフに対する「怖い」発言は本人から次第に語られることがなくなった。男性性を獲得し始めた勇希は更にアルバイトに挑戦しようとするという形で、社会性を身につけ始めたように思われた。

【事例2】花子、女性。ヨコ体に参加したばかりの花子は、荒い口調で話すという姿が見られたが、男子メンバーKのことを気にするようになってから、女になることを意識し出したように思われた。思春期、青年期に女子と共通感覚を持てなかった花子は、女性スタッフと語り合う中で、女性性を取り込み、女性への道を歩き始めたように感じられた。同じ年代の女性スタッフと、これまでに花子が感じていた関わりづらさを話すことで、女性スタッフとの距離を縮めることができた。また、最後の春合宿においては、女性メンバーと共に行動する姿がみられた。同性の友達と上手く付き合うことができない花子にとって貴重な体験であるように思われた。

本研究で取り上げた事例は、ともに男性性・女性性の受容が困難な事例であった。勇希は、男性性を獲得するのが非常に難しい事例であったが、男性性を獲得し始め、社会性を身に付けていったように感じられる。花子をみると、女性性を受け入れ自分らしい生き方を見つけていったように思われる。彼らは、ヨコ体験グループでの活動を通して、本来の性を生きること、または受容することが可能になっていった。

ヨコ体験グループに参加することで、男性性や女性性を取り入れることを可能にし、あるがままの自分、自然体の自分で人と関われるようになっていったのではないだろうか。

中学生の攻撃性・社会的外向性と 携帯メール依存との関連

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅲ専修

神 崎 正 子

本研究は、現代の中学生の攻撃性・社会的外向性と携帯メール依存との関連を検討し考察していくことを目的とした。愛知県の私立中学生330名を対象とし、LTの時間を利用して質問紙調査およびバウムテストを行った。

その結果、携帯電話所持者は9割におよび、大多数が所持していることが分かった。携帯電話の所持理由が積極的であると、携帯メールへの依存度が高くなり、所持理由によって依存度が変化することが分かった。また、携帯メール依存には性差がみられ、女性の方が高依存を示した。しかしながら、女性には攻撃性との関連はあまりみられず、男性には携帯メール依存の「情動的な反応」および「過剰な利用」の高さが攻撃性の高さに関連することが示された。また、社会的外向性は、携帯メールにおいて「過剰な利用」をする者ほど高くなることが示された。自由記述からは、全体的に脱対人コミュニケーション傾向が強く表れ、それに付随する不安の記述が見られた。群比較では、高群に携帯メールがコミュニケーションツールとして重要な役割を担い、密着の強さを示す特色がみられ、低群にはあくまでも“機械”と考え、危険性に敏感である特色がみられた。バウムテストでは高群および低群の群比較において、顕著ではないが違いがみられた。高群はトーンが濃く、ストロークが弱く、幹がじょうご状であり、枝先が尖っている様子が見られた。また、樹冠の輪郭線の堅さから自他との区別がつきつつ、社会や対人関係におけるあり方に「かたさ」を感じられた。低群はトーンが薄く、ストロークが弱く、幹が平行であり、陰影がつけられている様子が見られ、自己防衛的な印象をうけつつも、柔軟性が見受けられた。

以上のことから、携帯メールへの依存が必ずしも攻撃性・社会的外向性にネガティブな関連を示すとは言えない。しかしながら、男女それぞれの持つ心理的特質が関与しつつ、共に対面でのコミュニケーションとは微妙に異なったコミュニケーションの様子を見せるといえる。携帯メールへの依存には、友人関係の築き方、携帯電話に対する意識およびバウムテストでみられたような個人的特性が関与していることが考えられる。今後は攻撃性を細分化し、因果関係を明らかにするとともに、投映法を組み合わせることで、量的および質的の両側面からよりきめ細やかに検討していくことが課題として残されているといえよう。

身体症状の軽減化に対する 試行的心理療法の有効性

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅲ専修

椎 野 智 子

本研究は身体症状を有する対象者を募ったことで、身体感覚を通じた心理療法として自律訓練法または臨床動作法を、クライアント中心療法と併用して実施し、身体症状および自覚症状の変化について考察することにより、クライアントに適した心理療法の選択とその有効性について検討することを目的として行なわれた。

身体症状を有している大学生および聴講生6名（男性4名、女性2名、平均年齢33.17歳、SD=13.47）を対象とし、クライアント中心療法のみを実施する群、クライアント中心療法と自律訓練法を実施する群、クライアント中心療法と臨床動作法を実施する群の3群に各2名を分けた。各対象者の主訴は頭痛、腰痛、心悸亢進、喉の痛み、腹部膨満感、肩凝りであった。面接は1回50分を全8回（1名のみ全6回）で、インターバルは週1回とし、初回および最終回のセッションにてバウムテスト、CMI、VASの施行、および身体症状や面接の感想などの聴取を実施した。面接を実施した場所は、実験室や心理相談室ではなく、学内研究室および応接室を工夫して設えた。

本研究の結果から、CMIにおける身体的自覚症状、精神的自覚症状およびVASでは面接実施前後で有意な差が見られた。また、各事例におけるバウムテストでは面接実施前と実施後で自己意識の変化などが見られた。

これら3種の試行的な心理療法を全8回実施することによって身体感覚への気づきや身体症状に対する自己認識が促され、身体症状が軽減したと考えられる。これにより心理療法による介入の身体症状への有用性および心理療法の多義的有用性が示唆された。とりわけ身体症状を有する対象者においては、身体感覚を介した心理療法と言語的介入を併用することにより、有用性が高まると考えられる。

また、クライアントに適した心理療法の選択の際には、心理的問題に対する認識の程度および語りの多さを一つの指標とすることが有効であり、対象者が自らの心理的問題について語ることができる場合には内省を深める言語的介入を主とした心理療法（クライアント中心療法）を、心理的問題に対する認識がない場合や、語ることが少ない場合には主訴である身体感覚を介した心理療法（自律訓練法または臨床動作法）を選択することが望ましいことが示唆された。

不登校生徒のロールシャッハ像

ーリテストの検討ー

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅰ専修

島 中 里 香

本研究では、本学でのヨコ体験グループの活動が10年の区切りを迎えたことにあたり、これまで参加していたメンバーにフォローアップ調査をした際、同意を得られた元メンバー3名に対してロールシャッハ法のリテストを実施した。ヨコ体参加当時の結果と、今回実施したリテスト結果から、インタビューとは違った別の通路によって、現在のそのメンバーの状況の理解を深める目的で行った。

事例1は、根本的な不安の感情に対して自己愛によって回復をするという方法は変わらなかった。しかし、自分を弱いものとして防衛することから、自分を大きく見せて防衛する方法を取るようになった。また、異性を意識するようになったことが窺えた。不登校となり、限定された狭い世界から、ヨコ体という少し広い世界へと関わり、大学という様々な人が集まる広い世界に身を置いたことによって様々な知見が広がり、自分の外へと目を向けることができるようになったと考察された。

事例2は、不安感情が多くみられ、それに対して退行することによって防衛や自我統制をするという方法は変わらなかった。しかし、何かのショックで一気に防衛が崩れ、攻撃性や破壊衝動が表出され、どうにか対処するという状態から、強さへの憧れや男性性を獲得しようという姿勢が窺えた。物事を客観的に眺め冷静に判断できるようになったのは、ヨコ体卒業後、通信制高校で様々な人と関わったからだと考えられる。また、外的反応性が抑制的になったのは、通信制高校の人たちとの関わりや、機械の整備という働くことを通して出てきたのではないかと考察された。

事例3は、何かの刺激によって情緒的に揺さぶられやすい人であること、崩れを立て直そうと懸命に努力するという姿勢は変わらなかった。自身の力やスタミナが不足していて、退行や逃避といった方法しかとれなかったが、対処に成功した方法を積み重ね自信をつけることによって対処能力も上がり、難しい問題にも何とか対処できるスタミナをつけていったことが窺えた。意識的な統制に崩れがなくなり、冷静さや客観性、対人感受性を持ったのは、ヨコ体や通信制高校、こころの湯治場へ参加し、人と関わることのスキルをつけ、清掃の仕事という社会に出たことによって培われた力であると考察された。

カウンセリング導入の前段階としての チャットシステム利用の可能性

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅲ専修

津 田 昌 平

筆者は、心理学を学ぶ中で、「専門機関まで来談出来る人は少なく、多くの人は来談したくても出来ない」と感じ、そのようなクライアント（以下CI）に対して、来談の橋渡しとなるような手段として、チャットを利用したカウンセリング導入前の面接について考え始めた。

現在のところ、チャットによる面接について研究したのは少ない。岡本・松田（2008）はビデオチャット（以下VC）及び対面、Eメールの各カウンセリングについて比較を行い、対面よりVCの方が、話しやすく、緊張しにくく、心が落ち着きやすい、対面の方がVCより不安が解消しやすい、という結果を示している。

そこで本研究では、①1回目のみチャットを利用しその後対面面接へ移行する群、②1回目から対面面接を行う群の2群を設定し、両群の面接経過及び質問紙の結果を比較検討し、カウンセリング導入前のチャットを利用した面接の可能性について検討することを目的とした。

調査では、協力者6名（男性3名、女性3名）を①チャット群、②通常群の2群に分け、週1回、各回60分（質問紙調査30分、面接30分）の調査を計3回行った。

その結果、①チャット群では、不安の増加率が低く、面接の中で考えがまとまりやすく、緊張感や問いかけに対する抵抗感は低くなるが、物足りなさが残る。②通常群では、不安の増加率が高く、面接後のすっきり感が高く、物足りなさは少ないが、緊張感が高く、考えがまとまりにくい、ということが示唆された。すなわち、チャット面接は「直接の面接よりも不安が少なく、考えがまとまりやすく、緊張しにくく、問いかけに対する抵抗感が低い」ため、抵抗感を持つCIが初めて面接を受ける場合に有効な面接法となり得る」と考えられるが、「面接後に物足りなさが残る可能性もあり、意欲の高いCIは逆に面倒くささを感じてしまう、というデメリットを有する可能性がある」と考えられる。よって、チャット面接のみで真にCIを支援することは難しいと思われた。本研究の結果からは、「チャット面接はあくまで直接面接へ繋げるための橋渡しの役割を担うものと考え、直接面接とセットで利用することにより、より効果的にチャットを利用出来る」という可能性が示唆された。

しかし、本研究は多くの問題点を有しており、今後は至らない部分を再検討し、さらに研究を進めていく必要があると思われる。

不登校生徒の母親面接 —研修生の体験を通しての一考察—

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅱ専修
鶴田 樹

母親面接において、「養育環境としての母親」と「1人のクライアントとしての母親」の2つの視点を持った援助が必要となってくる。本事例は、相談員研修生である筆者が初めて担当した母親面接である。勉強中である研修生が「教育指導面接」と「臨床心理面接」との間で揺らぎながら続け、10回程で中断した面接でもある。母親に起こった変容、中断の理由、担当カウンセラーの揺らぎについて検討することを目的としている。

事例の概要として、当時中学3年生の長女の不登校を主訴として、母親と長女が来談。母親を筆者が、長女を別の研修生が担当し、母子並行面接を行った。当相談室の方針により、母親面接の料金は徴収しなかった。経過は、第Ⅰ期は主に状況・事実確認の時期となった。第Ⅱ期では、長女の再登校が見られ、それにより母親に余裕が出てきた。それと同時に受験への焦りが見られた。第Ⅲ期では、不登校の再発とそれにより母親の感情が表出された時期であった。第Ⅳ期では、長女の弟である長男の問題と子育ての仕方を母自身が振り返った時期となった。#10の面接後の電話連絡では、「登校したりしなかったりしながら、長女のペースで登校している」と話していた。

事例の経過を見るに、母親は最後まで進学にこだわりながらも、徐々に親は親、娘は娘の人生として感じ、考えることができてきた。また、冷静に理屈で話していた母親が面接の中で涙を流したことで感情が表出し始めていった。そして、長女も直接的に母親に反抗し、甘えるように褒め言葉を要求し始めた。また、自ら進路を決定して自分のペースで登校を始めた。終結事例とも捉えられるが、しかし、カウンセラーが抱く態度が揺らぎ、見通しがもてなかったことで、中途半端な終結（中断）となったと考えられる。そして、若く勉強中の研修生が臨床心理面接と教育指導面接を統合していくには、不安を抱えた親たちに的確なアドバイスを与えながらラポールを形成し、更に親たちの苦しみに共感・受容していくことで、そのラポールを安定させていく。その後、臨床心理面接と教育指導面接が統合されていくと考えられる。しかし、統合するにはベテランと呼ばれる域にまで達する必要がある。経験と知識を増やし、知見を深めることが課題となるだろう。

ロールシャッハ法における 青年のイメージ・カードの研究

—選択理由の検討—

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅰ専修
鳥本 麻衣

本研究では、ロールシャッハ法を通常の方法で行った後の限界検査の一つであるイメージ・カードについて、現代の青年が、父親、母親、自己イメージ・カードとしてどのカードを選択するかを検討し、その父親、母親、自己イメージ・カードとして選択した理由、ならびに、それらのカードにみられる反応内容との関係について考察した。

対象は、2001年～2008年にロールシャッハ法を実施した大学生及び大学院生100人（男性34人・女性66人）である。実施方法は、通常のロールシャッハ法を施行後、イメージ・カードの選択を行った。

結果と考察について、父親イメージ・カードでは、10枚のカードの中でも、カードⅣが最も多く選択されており、28人（28%）であった。その選択理由をみると、「大きい」や「どっしり」と述べる者が多くみられ、先行研究と一致した。カードⅣを選択し、「大きい」と理由を述べた被験者の反応内容をみると、権威的な父親イメージと同時に、安定感や安心感といったポジティブな感情もみられた。一方で、同様にカードⅣを選択し、「大きい」と選択理由を述べた被験者の中には、ネガティブなイメージを抱く者もいた。

母親イメージ・カードでは、カードⅦが最も多く選択されており19人（19%）であった。カードⅦとほとんど差がなく、18人（18%）がカードⅩを選択した。カードⅦを母親イメージ・カードとして選択した理由をみると、「やさしい」と述べる者が多く、先行研究と一致した。「やさしい」と選択理由を述べた被験者の反応内容から、母性的なイメージが多くみられた。また、カードⅩを選択した被験者の選択理由をみると、図版の明るい色彩と母親の性格を結び付けている被験者が多かった。

自己イメージ・カードでは、カードⅩが24人（24%）と最も多く選ばれており、選択理由をみると、「楽しい」と述べる者が多くみられた。自己イメージ・カードでカードⅩを選択しており、もっとも好きなカードでもⅩカードを選択している者が17人おり、青年の自己肯定感の高さがうかがえた。

今後の展望としては、各イメージ・カードで選択されたカードの相関を統計的に検討する等、様々な切り口で研究を行なっていきたいと考えている。

青年期女性における摂食障害傾向と 親子関係との関連についての探索的研究

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅳ専修

中 村 福 子

近年、摂食障害の問題は一疾病の枠に留まらず、一般青年においても極端なダイエットや過食、痩せ願望がみられることが指摘されている。波多野（1998）の報告では摂食障害患者は親に支配されていると感じているが、親はその支配性に気がついていないと指摘している。今回の研究では対象者を青年期女性に限定し、摂食障害傾向と親子関係について本人と親の認知の違いについて検討することを目的とした。調査は2008年12月に実施した。子どもは102名、平均年齢は20.25歳（SD=2.36）であった。親の質問票の回収率は、父親が30名（29.5%）、母親は32名（32.4%）であった。EAT-26の得点を元に子どもの摂食障害傾向を正常群と傾向群の2群に分類分けを行ったところ29.41%が傾向群であった。青年期女性の中に摂食障害とはいかないまでも摂食障害傾向の高いものの存在が確認された。体型について検討を行ったところBMI値は正常群、傾向群ともに平均約20という数値が得られた。体型は周囲と同じであっても自分が太ることに恐怖感を抱いている者の存在が確認された。また自己認知について検討を行ったところ摂食障害傾向の高い者は正常群に比べ性的テクニックに自信があるという傾向がみられた。摂食障害傾向と性行為との関連性が示唆された。親子関係については摂食障害の傾向の高い者は子どもの方から父親との接触をあえて避け、関わりをできるだけもたないようにしているという結果が得られた。親からの質問紙調査の結果から、子どものEAT-26得点が高くなるほど、父親は厳しいしつけをしていると感じている傾向がみられた。これまで母親との関係について大きく問題になっていたが、父親との関係が摂食障害傾向と関係していることが示唆された。これらの結果から親の関わり方により摂食障害患者を減少させることができるのではないかと考えられる。さらに摂食障害患者の治療においても子ども、父親、母親それぞれがどのように家族関係を理解し、どのような関係をもとうとしているか知ることは重要になってくるのではないだろうか。時代の変化により、家族の姿が変わってきていることも確かである。さらに今回の研究では青年期女性に調査対象を限定したが、年齢、性別を限定することなく幅広く研究を行うことも治療、予防においても重要な研究であると考えられる。

家族基盤の揺らぎを体験している少年の事例

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅱ専修

中 村 美沙都

父親に育てられる子どもに対する心理的援助を取り上げた事例は、まだまだ少ないのではないかと現状を踏まえ、両親が離婚することで父子家庭となる子どもに対する心理的援助について述べる。

少年の父親は、「子供たちに両親が離婚した事実をどのように伝え、その後のケアをどうしたらよいか」を主訴として来談し、子どもへのプレイセラピーを希望した。本事例の対象児は小学校に通う10歳の少年であり、両親の別居後から、離婚したのではないかと疑問を持っていたが、父親からは事実が伝えられないままだった。これは、少年との約1年間、計18回のプレイセラピーの記録によるものである。初めて会った時、彼の体型は少し痩せていて、線が細く、年齢より少し幼い印象を抱いた。

彼の遊びは、大きく分けてボードゲーム、ドミノ、箱庭の3つに分類される。ボードゲームでは回数が進むにつれて、今まであまり表面に出されることのなかった感情や勝ちたいという気持ちが言葉化され、並べて壊すドミノ倒しでは、悔しさ、喜びや達成感を味わううちに素直な感情を表現するようになった。人生ゲームは現世に近く意識的な表現、箱庭は無意識的な表現であり、それを繋ぐものとしてドミノやプラレールが存在していたと考えられる。

家族崩壊の危機という大きな波を迎えようとしていた彼は、第1回目のセッションで箱庭と出会い、離れて暮らしている母親との繋がりを求める気持ちを箱庭に表現した。第2期では、作品の中に家族をイメージしているアイテムが登場し、離婚裁判で対立関係にある両親イメージ像が同じ領域に置かれていた。しかし津波や竜巻が押し寄せるかのような作品の後、箱庭の中における家族の配置が変化し、両親に和解の余地がないと感じ取ったと考える。このように言葉では表現できない自分の気持ちを、箱庭という表現媒体によって表現していたと考えられる。最後のセッションでは、生命の源とされる森を表現したが、現在もセラピーは継続中の為、仮説の段階にある。

今後は、離婚を受け入れていく作業や、失われた母親を心の内に回復する作業になるだろう。こういった状況を乗り越える為には、周りのサポートが必要であり、離婚家庭に対する心理的援助が増えていくことが望まれる。

大学生における認知療法的ホームワークを用いた抑うつ低減効果

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究IV専修
橋本 直英

当研究は、統制群と実験群の二群をもうけ、ホームワーク前後に質問紙調査を行った。実験群に認知療法で用いられるホームワークを行った。統制群では、実験前後の抑うつ、否定的自動思考、肯定的自動思考、抑うつスキーマに大きな変化は見られなかった。実験群では、抑うつが実験の前後で低減する実験協力者が多かったが、実験協力者によって、その変化にばらつきがあった。否定的自動思考は実験前後で、やや低下が見られた。ホームワークによって、否定的自動思考を残留させることが少なくなった実験協力者が多かったのだろう。肯定的自動思考は、ホームワークの後で肯定的自動思考が高まったがその変化は実験前後で実験協力者によって変化にかなりばらつきがあった。

仮説1. は実験群の抑うつ、否定的自動思考がホームワーク後に低下するであった。これは平均値と標準偏差から分かる範囲において肯定された。抑うつと肯定的自動思考は各個人によって変化の差が大きいと考えられた。仮説2. は、抑うつスキーマはホームワーク後も低下しないであった。実験群の抑うつスキーマは、実験後に強まった者が多かった。抑うつスキーマは2週間程度のホームワークでは変容することはないのかもしれない。むしろ、2週間の間に、その日にあった否定的な出来事を思い出すことになり、抑うつスキーマを活性化することになったと考えられる。仮説2. は肯定された。むしろ当研究では抑うつスキーマがホームワーク後に強まる結果となった。ホームワークの感想「セルフモニタリングシートを書くときに書く出来事を思い出すので、嫌な気分になった」は仮説2. の抑うつスキーマの活性化についての考察に関連すると考えられる。「前向きな考えを考えることで、後ろ向きな考えを引きずらなくなった」は、肯定的な認知を考え出すホームワークの作業を行うことによって、否定的自動思考を残留させずにすんだ実験協力者の感想である。ホームワークの実施によって抑うつの認知変容がみられるという仮説3. は全てにおいてではないが肯定された。

以上から、2週間という短期間でも認知療法的ホームワークは大学生に有効であることが示唆された。効果に個人差が認められ、実際に施行する場合には、その個人に合った適切なホームワークを選択することが必要である。

内省が深まらない成人女性の事例 —自閉症スペクトラム障害圏の人とわかるまで—

心身科学研究科心理学専攻 人格心理学研究I専修
古田 菜採

本論文では、内省が深まらなかった成人女性の一事例について検討している。クライアントは発達障害の連続体である自閉症スペクトラム障害の範疇で、障害と認定されないほどの軽いグループに位置するタイプと思われるが、筆者がそれに気づくのに時間がかかってしまった。この問題を検討すべく、その経過および考察を述べている。

第1期では、同一性拡散の状態であるクライアントの生育歴から、同性への葛藤が強いことが分かる。怒りをぶつけられずにそのままなかったようにしてしまい、関係を絶つこと、仕事を辞めることで対処してきた姿が浮き彫りとなる。

第2期では、ライバル葛藤が顕著に表れた時期である。同性とほどよい関係・適度な距離感を保てないクライアントの問題が露呈した。同時にようやく面接の中で insight ができ始め、クライアントが内省し始めた時期でもある。

第3期では、直面化をするが治療抵抗の見られた時期である。傷付きたくないから自己主張しない自分のスタイルに気づき始め、涙を流すクライアントの姿が見られる。しかし、その後も沈黙がちになるのだが、迂遠な話が続き、なかなか深まっていけない経過を辿る。

そして第4期では、面接が深まっていけない要因が分かる。クライアントは自分自身と「向き合う」ことができないということが分かり、洞察を求めるのは困難であった。現実場面での具体的な対応方法を考えていく方針に切り替えたところで面接を終えることとなった。

総合考察では、この経過の中で、クライアントの具体的な発言から自閉症スペクトラム障害圏だと予測できなかったかどうかの見解を述べている。しかし、生育歴からは自閉症スペクトラム障害圏の人とは分からないくらい軽度である故に、経過を辿る中でしかなかそこ気づくことは出来ないと思われる。この問題を見極めるということは難しいことであり、面接の中でその都度見立て直していくことが重要であるといえる。そして、今後このような自閉症やアスペルガーの特徴を持つが、健常者に極めて近いごく軽度のグループに位置する人々への研究が進み、より適切な支援がなされていくことが必要となっていくであろう。

不登校生徒へのグループ・アプローチ —全体セッションにおけるスタッフの役割—

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅰ専修
堀 川 聡

問題・目的

本研究は本学で実施されている不登校生徒に対する集団心理療法である「ヨコ体験グループ」において、言語的な関わりを主体とする全体セッションに焦点を当てたものである。その中でも特にクライアントである『メンバー』とカウンセラーでありファシリテーター、コ・ファシリテーターとしての役割を担う『スタッフ』の内、スタッフ側の役割について注目し、全体セッションにおけるスタッフの関わり方を考察することで現在のグループにおける課題を明らかにし、今後の活動への寄与としたい。

対象・方法

本研究は事例研究とし、「ヨコ体験グループ」の参加者を対象に「全体セッション」の記録と春合宿後に行われたスタッフ同士での話し合いの記録を用い、2007年度春合宿の全体セッション第1回から第5回までのセッションでのスタッフのあり方を検討する。各回の経過の内容と質的・数量化したデータから、春合宿全体の展開をまとめ、グループがどのように展開してきたか、各回における肯定的な点、否定的な点を考察する。そこから、全体セッションにおけるファシリテーションのあり方、ねらいについての検討を行い、さらに、スタッフの立場のあり方や不登校生徒のためのグループ・アプローチとしての有効性とその危険性についても検討する。

結果・考察

発言回数からはファシリテーター、特定スタッフへのスタッフ間の依存的な内的な動きが感じられた。また、合宿後の話し合いにおけるスタッフの発言においても同様のことがいえ、外枠スタッフと呼ばれるOB/OGスタッフへの院生スタッフの依存が特に感じられる結果となった。発言内容（ラベリング）からはスタッフのファシリテーションの在り方が「発言を促す」ことに偏っており、自己表明によるグループの安全性を高めていくというアプローチの仕方が薄いように思われた。逐語記録からは、スタッフ同士の連携の不全が見られ、セッションが上手く機能していない様子が浮き彫りとなった。以上の結果から、確かに経験豊かなスタッフへの依存的な心情は理解できるが、特に導入段階においてより院生スタッフの自発的な自己開示と全体的な積極性が今後のグループ活動に求められるように思われた。

更年期女性における不定愁訴に関する一考察

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅳ専修
山 内 彩

女性のライフサイクルにおいて、更年期、特に閉経前後の期間とされる更年期は不定愁訴が現われやすい時期の一つといわれる。この時期の不定愁訴症状は、内分泌的なホルモンの変動に加えて、心理・社会的要因や環境要因などといった様々な要因が関連していることが報告されている。そこで、本研究では生きがい及び夫婦関係に焦点づけ、これらの要因と更年期症状との関連性を明らかにすることを目的とした。研究方法は、35～60歳の一般女性150名を対象として質問紙法による調査を行い、有効回答の得られた130名（平均年齢48.9歳）を分析対象とした。まず月経状態は精神神経症状と関連がみられ、更年期障害の経験意識は精神神経症状、血管運動神経症状、更年期指数と関連がみられた。また、対象者を年齢群に分けた検討も行ったが、更年期症状との関連はみられなかった。次に、生きがいと更年期症状との関連を検討したところ、生きがいの有無は精神神経症状において有意差がみられ、生きがいの対象としては「夫婦生活」、「趣味」、「仕事」、「友人など家族以外の人との交流」、「自分自身の内面の充実」において、生きがいを感じている者と感じていない者との間で更年期症状に有意差がみられた。そして、夫婦間のコミュニケーション態度と更年期症状との関連性を検討した結果、妻が夫に対してネガティブなコミュニケーション態度を行うほど更年期指数、精神神経症状が高まり、他方、夫が妻に対してポジティブなコミュニケーション態度を行うほど更年期指数、精神神経症状、知覚症状が低下することが明らかとなった。夫婦間ディストレスと更年期症状との関連を検討した結果、妻が夫に対してポジティブな感情を抱くほど更年期指数、精神神経症状は低下し、妻が夫に対してネガティブな感情を抱くほど更年期指数、精神神経症状が高まることが明らかとなった。

以上より、更年期症状という不定愁訴の要因として、生きがいや夫婦関係が心理・社会的な要因の一つとして考えられることが示唆された。不定愁訴の背景として心理・社会的な要因が関わっていると考えられる場合には心理臨床的なアプローチも必要となるのであろうと考える。個々のケースにおいて各々問題となっている要因を捉えていくと共に、全体として捉えながら取り組んでいく必要があるのであろうと考える。

高齢入院患者の“生と死の語り”

—高齢化といかに向き合うか—

心身科学研究科心理学専攻 人格心理学研究Ⅰ専修

横井 祐子

はじめに 日本の高齢化率は21%を超え、“本格的な高齢社会”となった。高齢化による課題は多いが、人生の先輩から学ぶことも多いだろう。

問題意識 ある調査では、家庭での介護経験で、母親のストレスを認識したり、不満や寂しさを抱いた経験を有する回答がみられた。一方日野原は、家族が高齢者を世話する姿を子どもに見せることは、かけがえのない学習だという。このような中、世代間交流は高齢者と若者とを繋ぐ大切な機会となるのではないか。

実践 筆者はある病院で、高齢入院患者への認知機能評価検査の実施とお話をうかがう活動をしている。

事例と考察 患者と筆者とのやりとりを事例として提示し、“筆者の体験した世代間交流”として紹介。

テーマ①：なぜ自分だけ……—周囲の若さ・健康さと比べる—【2事例】

ある調査で、日本は健康であると自覚する高齢者が多いことが分かった。実際に健康でいることが当然の社会になったことを考えると、このような状況に陥る者も少なくない。

テーマ②：妻として夫の死を語る—思い出・末期時など—【3事例】

ある調査で、患者が安らかに亡くなることが死別後の家族の支えとして大きいことが分かった。事例からも、夫が苦しまずに亡くなった場合と比べ、夫が自ら命を絶った時の悲嘆は複雑であることが分かる。

テーマ③：個人的体験（通常では理解しがたい体験）【2事例】

三谷と古屋は、新しい高齢者像の構築には、実証的・科学的研究とそれを飛躍する、総合的視点が必要であるという。実証的・科学的な姿勢では患者を理解出来ない語りが、実際に多く存在する。

テーマ④：戦争と当時の状況【3事例】

村上は、戦争体験継承は、継承することにより使命感を果たす・存在証明となるなどとしている。一方で継承は、伝える側以上に受け取る側の問題でもあることも忘れてはならない。

総論 田中らは、幼少期に頻繁な世代間交流を経験した子どもは「年を重ねるとは」「人生とは」などについて、感覚的に理解するという。学齢期以降の忙しい日々においても、豊かな世代間交流が“生老病死”を自然と感じ、高齢化社会へ自然と目を向けることを可能にするだろう。

問題行動を繰り返す子どものプレイセラピー

—相談室活動における臨床心理的地域援助も含めて—

心身科学研究科心理学専攻 人格心理学研究Ⅰ専修

若山 遼

本研究は、小学校で問題行動を繰り返す男児のプレイセラピーと、スーパーバイザーとの小学校への臨床心理的地域援助を主とし、本児の母親面接、本児の担任への聞き取り調査を含めてまとめ、考察したものである。小学校で起こった問題を大学の相談室というフィールドで扱い、問題の背景と根本的解決へのアプローチと、学校への危機介入の一例を考察し、臨床心理士及びそれに準ずるものが、学校だけでは解決が困難な事例に関わる際の対応方法について、一助になればと考えた。

クライアントは小学校5年生の男児。4年生時より授業を妨害する、他児や教師に暴力をふるったり、窓から飛び降りようとするなどの行動が頻発していた。本児の母親は本児の問題行動への認識が甘く、学校を批判するなど協力関係の構築が困難な状態であった。

プレイセラピーでは、本児を受容するという態度に重点を置くのではなく、受容しつつもプレイの枠を徹底的に守るということを意識して臨んだ。決められたルールを守ることで、継続的に他者との関係が持てるという意識を本児が再認識することを目的とした。主に体を使った遊びをしたが、プレイの最後には何をして遊んだかなどの振り返りをする時間を設けた。回を重ねるごとに本児との関係は深まり、チャムシップのような関係になった。本児はセラピストの言葉かけに意味を感じられるようになり、だんだんと言葉を介したやり取りも増えてきた。学校生活でも、問題行動が減り、他児に手を出しても謝ったり、自分の意思を言えるようになってきた。

問題の背景には、家庭の世代間連鎖による負荷が本児に多大なプレッシャーを与えており、本児が学校でしか暴れることができなかった背景が考察された。母親が背負わされた大きな負荷が、本児にも大きく背負わされ、抱えきれなくなった本児の叫びが問題行動となって表れたと考えられる。

学校へのコンサルテーションは、まず学級としての機能を回復させることを最優先とし、本児と学級との距離をとることによってそれが図られた。また、問題の背景をある程度学校側へ伝えることで、学校と本児や母親とが対立しないように配慮した。

本児の変化とともに学校も落ち着きを取り戻しつつあるが、その要因には学校と相談室の信頼関係、情報の共有といったことが考えられた。

自然療法に関する心理臨床研究 —森林セラピーの心理的効果について—

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅱ専修
稲 村 茂

森を歩くことは人の快適感につながる。「森林セラピー」とは、森林浴の効果を科学的に解明し、心と身体の健康に活かしていく客観的手法である。森林セラピーが治療法として活用されているドイツでは、クナイプ療法という自然療法が使われている。

人工環境下で日常生活を営んでいる現代人は、様々なストレス要因にさらされ、心身症やうつ病などのこころの問題へと発展する可能性が高い。森林セラピーはストレスに効果的な生理学研究の結果も出ていることから、本研究では森の体験を臨床的な視点で検証していく。

本研究は、美杉町、上松町の森林セラピー基地で、9月から11月の3日間で実施した。手続きは、①散策前の質問紙・S-HTP、②森林セラピー体験、③散策後の質問紙・S-HTP、④インタビュー形式アンケートである。

研究Ⅰ（生理的データの検討）では、血圧は安定化、心拍は上昇、唾液ストレスチェックは増加、SRQ-Dは低下という結果が得られた。

研究Ⅱ（心理的データの検討）では、8事例を取り上げ、森林体験について検証した。この結果から、森の体験は、①森の癒し効果を自ら感じ取り、元気になること、そして、人とのつながりができ、コミュニティ効果による活力を作り出す体験、②森を歩くことで、内省化が進み、じっくり自分と向き合う時間ができ、心身のエネルギーを補給する体験、③動物と共に人間も森という場所で生きることで、本来あるべき姿、つまり原始的な生活に戻れるという体験、④都会での生活を忘れ、子どもの時に自然と触れ合っていた感覚を再体験し、こころの柔軟性を取り戻す体験、⑤神の住む聖なる場所を歩く神秘的な体験とまとめることができる。また、S-HTPでは、禅の教えにある十牛図で示されている自然が大きく表現され、自然との一体感を強調するという傾向がみられた。

今後、森林セラピーが果たす役割は、現代人が森に還り、自然と共生する原始的な感覚を再体験することで、日常生活から解放され、本来の人間らしさ、生命力を取り戻し、心身ともに健康な状態を作ることであろう。このことは、ヘルスプロモーションの視点からも、地域社会の健康づくり活動につながり、現代人が森に還るという21世紀のテーマに取り組むことだといえる。

大学生におけるレジリエンシー (resiliency) の研究

—ソーシャル・サポートの観点から—

心身科学研究科心理学専攻 発達心理学研究Ⅱ専修
栗 田 史 子

本研究の目的は青年期におけるレジリエンシーを取り上げ、レジリエンシーとの関連が推測されるソーシャル・サポートの観点からレジリエンシーについて検討し、レジリエンシーの構成要素とレジリエンシーとソーシャル・サポートの利用の関連を明確にし、臨床への応用へと道筋をつなげていくことであった。発達過程で重要な役割を担ってきた家族に焦点をあて、家族・親族に対し、トラブルが起こったときにその中の誰にサポートを求めるか、また、レジリエンシーがサポートの希求にどのような影響があるかを以下の3仮説を設定し検討を進めた。1.「レジリエンシーの程度に男女差が見られるだろう。」2.「レジリエンシーの程度によってソーシャル・サポートの希求度に差があるだろう。」3.「レジリエンシーの各因子により、ソーシャル・サポートの求め方に差が生じるだろう。」

4年制大学に在籍する学生180名（男性78名、女性102名）を対象に、質問紙（フェイスシート、レジリエンシー尺度、ソーシャル・サポートの利用度に関する項目）を用いて解析を行なった。結果は(1)レジリエンシーの因子は、「包括的思考」「意思力」「自己肯定」「好奇心」「楽観性」「自己受容」の6因子構造であった。(2)レジリエンシー合成得点における性差は見られなかったが、「包括的思考」「意思力」「自己受容」で性差が見られた。(3)サポートの利用は、母親、父親、きょうだいに求めやすいが、トラブルの内容によって求め方の様相が異なった。(4)レジリエンシー各因子とサポート利用度の関係について Pearson の相関係数を各因子別に算出すると、「意思力」「自己受容」の2因子と父・母・きょうだいに対するサポート利用度との関連が見られた。(5)レジリエンシー各因子得点の高群と低群とサポート利用度の様子は、「意思力」「自己受容」の2因子で、高群の方が低群よりもサポートを求めやすい傾向にあった。このことから、よりよくソーシャル・サポートを利用していくためには、「意思力」と「自己受容」の要素を高めていくことが必要であるということが示唆された。最後に結果を基に、よりよくサポートを求めるためのレジリエンシーの役割と臨床への応用について考察をした。

ファシリテーションが及ぼす心理的影響

心身科学研究科心理学専攻 人格心理学研究Ⅰ専修

成田 有子

【研究目的】 この調査では、企業で働く個人が、業務時間内のファシリテーションに参加することによって、どのような心理的な変化が起きるのかを調べた。

【方法論】 要因を測定する尺度として、組織コミットメントとストレスが用いられた。まず、ファシリテーションに参加する前の状態で、組織コミットメントとストレスの測定をして、その関係を分析した。その調査対象は、企業10社の社員、のべ163人であった。

【結果】 これにより、先行研究でも示されていた組織コミットメントの情緒的要素とストレスの間には負の相関がある（仮説1-A）ことが示され、また、組織コミットメントの存続的要素とストレスの間には正の相関がある（仮説1-B）ことが示された。また、組織コミットメント尺度に代表関連要素として追加した代表へのコミットメントと、ストレスの間には負の相関がある（仮説1-C）という仮説を検証するために分析を行った結果、その仮説は支持された。

次に、ファシリテーションに参加した人たちを対象に、参加の前後で組織コミットメントとストレスの測定を行い、その変化を分析した。その対象は、上記のうちの6社の社員55名であった。ファシリテーションの前よりも後のほうが情緒的要素が上がる（仮説2-A）と、ファシリテーションの前よりも後のほうがストレスが下がる（仮説2-B）を予測した。分析の結果、仮説2-Bは支持され、仮説2-Aは支持されなかった。

試行カウンセリング事例の検討

—カウンセリングにおける直面化の問題—

心身科学研究科心理学専攻 臨床心理学研究Ⅰ専修

伊藤 伸恵

【本研究の位置づけ】 現代社会は、様々な問題を抱えている。精神障害や不安障害などの心理的問題だけではなく、不登校やいじめなどの教育問題、自閉症や学習障害などの発達の問題への対応は社会全体のテーマとなっている。このような心理的苦悩を軽減する為に心理援助を行い、それを通して問題の解決や改善を見直す学問が臨床心理学である。本研究の目的は、第1にカウンセリングを現実に悩み苦しんでいる人を対象とし実践することで、クライアントが自分自身の姿を冷静に客観的に捉え「自分らしい姿」を少しでも取り戻せることを目的としている。第2に、私自身がカウンセリングを実践することによりクライアントと共に考え悩み、回数を重ねることで自己のカウンセリングというものを考え、今後のカウンセラーとしての大きな枠組みを学ぶことを目的とした。

【事例】 結婚離婚を繰り返して、精神的に不安な37歳の女性を対象とし、週1回60分の面接を1年間行った。2度の離婚を経験しているクライアントは、今度は別の男性と同棲をしていて、又同じ事を繰り返してしまうのではないかと不安な毎日を送っていた。35回の面接を通して、始めは混乱していたクライアントであったが、話をするうちに次第に物事が整理され、又途中で妊娠をしたことにより、初めて自分自身の考え方や生き方について深く見つめ直し始めた。

【考察】Ⅰ期～Ⅵ期まで分けたクライアントの浮き沈みし易い特徴が面接を通して見えてきた。また、投映法を行うことによりクライアントの内的世界をより理解する手助けとなった。全体的には、妊娠を転機としてクライアントの気持ちが前向きに大きく変化していった。問題に直面化することでクライアントは、少しずつ自分自身の特徴を客観的に捉え、物事を前向きに改善してゆこうとする気持ちが生まれてきたように感じた。

【まとめ】 今回行った、試行カウンセリング事例を通して私が学んだものは、カウンセリングの基本である①親和的な関係の形成②傾聴③共感的理解④直面化⑤純粋さなどである。これらは、私の今後の面接の土台となるものと思われる。